

新しい家族像と

「新がんこおやじ」のすすめ

大西 玄 一 郎

一、おやじの椅子

昔の農家の囲炉裏端には、父親の席が設けられていた。

それは旧い考えに基づくものであったにしろ、また、実際は母親が力を持つ母系社会の中で象徴的で、形式的な地位であったにしろ、父親・夫の立場には確固たるものがあつた。

現在はどうかであろうか。

優しい兄貴のような父、気兼ねない友達のよ

うな夫、それはそれでいいとしても、家族の核としての父親は姿を消しつつある。

誤解のないように断っておくが、父性や母性が先天的に備わっているとした男女の性役割を肯定しようとするものではない。

家族という集団のリーダー、核としての役割の父親像がなくなっているのである。

母親・妻がそれを担っても一向に構わないのだけれども、一般的に核としての父親・夫という位置が、他の家族構成員に比べて、一段と落

ち込んでしまっている現実がある。

いわば、おやじの椅子が家庭から消えているか、壊れているという状態が生じている。

家族そのものが揺らいでいるいま、新しい家族と父親・夫としてのおやじのあり方について、わが国の文化像から捉え直し、考えてみたい。

二、世界の日本化

グローバルな芽を秘めた日本家族

(一) 民族文化の特質

日本民族は、情緒的なウェット民族である。それは生命を維持する食の生産が、緊密な集団作業を必要とする稲作によってなされたことにあり、強い集団帰属意識を形成した。わが家、わが村、わが国という意識であり、その内部では論理でなく情緒的な関係が重きをなした。つまり心情的な、ウェットな民族が誕生したわけである。

次に、島国としての存在である。島国という

のは独自文化を生み易いとされるけれども、これは侵略的な、つまり強制的な文化移入がなく、いわば自分たちに都合の良い文化のみを選択導入し、変形が容易いということである。

例えば仏教も導入にあたって論争はあつたものの、その思想を情緒的に受け入れ、日本古来の神道思想とらまくドッキングし取り入れてきた。

そうしたいわば曖昧で寛容な民族文化が、近世徳川期における鎖国によって、わが国独特の文化として醸成されるにいたつた。

この中であつて、家族制度も、稲作の指導者としての緩い力を持つ家長という存在を維持したまま、近世に政治的意味あいを持つ権力的家長の側面を吸収し、それが明治期の中央集権国家の成立と同時に、戸主権をもつ強大な家長を中心とする家族の成立となつたといえる。

(二) 文化の国際化と家族制度のギャップ

既におわかりのように、わが国の文化は明治

の初めに新しい道を歩み始めている。

「脱亜入欧」のスローガンに示されるように、日本は驚くべきスピードで西欧文明を吸収しはじめた。これは西欧諸国が、狩猟社会をその基盤とし、個人の独立と論理的、合理的思考を身につけた、いわばドライ民族であったのに対し、ウェット民族として物事を徹底して吟味せず曖昧に吸収出来たからである。

ただ、家族制度は、本来、明治期に西洋の制度を吸収すべき所を、国家の要請によって、中央集権に合わせた戸主制度を完成させてしまった。

ウェット民族はその柔軟性、フレキシビリティが高いのが特質だが、洋食を食べ、洋服を着、椅子に坐り、洋楽を聴き、キリスト教を信仰しながら、家族制度は古いままに縛り付けられたのである。生活や物が変われば、心も家族制度も変化しなければならない、それを抑え込んだのである。そういう虚構を可能にしたのは、近代国家の道を歩みながら、基本的な封建制度、

その基盤としての小作農の存在する稲作農業社会をそのままにしたからであった。このことは後に大戦の敗北という大きなつけを払って解消することになる。

(三) ウェットからセミ・ドライ化へ

さて、約半世紀前の大戦の敗北は、農地解放という農業社会の変化とともに、明治以来の西欧文明の流入以上の、想像を絶する文化の流入を招いた。

大きな文化ショックは時として一つの国を滅ぼすことさえあるが、驚くべきことに日本はこれを、やすやすと受け入れてしまったのである。柔軟性をもつ極めてフレキシビリティに富んだウェット民族の面目躍如というところである。

家族制度も又、血を重視する縦系列の制度から、夫婦中心の欧米型へと変化していく。

中央集権に合わせた家長制度も漸く最近に至って姿を消しつつある。

この半世紀、日本民族の基盤が大変化が起っていた。農業社会の消失である。集団作業を必要とする、故に曖昧なウェット社会は、明治期の工業化から徐々に変質を余儀なくされていたが、大戦後は加速度的な変貌をとげる。

ある程度までの工業化の間は柔軟なウェット民族は、集団の力で、人類史上類をみない経済成長をまねいた。が、本来工業化は進めば進むほど人は部分品となり、人と人との曖昧なつながりや協力を必要としない。つまり日本人はいやおうなく、ドライ化への道を歩み始めることになる。

このことが明確にならない間、日本の高度成長は、ウェットな人間関係がもたらした日本式経営としてもはやされた。

現在、この日本式経営は本家のおが国で見直しが進んでいるが、興味を引くのは、経営者も労働者も、欧米流の契約に基づくドライな労使関係に完全移行するのを正解とは考えていないらしいことである。

いわは、セミ・ドライ化といつていい。

何もかも取り入れ消化し、対立を好まないウェットな民族から、情緒的側面を残しつつ、ドライな契約社会に移行しつつある。

逆に欧米はどりであろうか。

ドライで独立心の旺盛な欧米では、今の所、ウェット化の兆候はない。しかし、ウェットのなアジアの、そしてその代表の日本文化は流入を続けている。

オリエンタル趣味から一歩踏み込んだ興味関心に移り、自らの主体性を守りつつ生活を豊かにする道具として、日本文化を急速に受け入れつつあるのだ。ちょうど明治期・大戦後の日本のように。やがてそれは心情的理解にまで到達すると筆者は考える。

これは家族制度についてもいえることである。さらに脱工業化社会や長寿社会のトップを走る日本のあり様、家族制度のあり様は、セミ・ドライ化を志向する限り、来世紀を見据えた実にグローバルな芽を秘めたものであるといえ

る。

逆説的に言えば、日本の国際化から世界の日本化が始まるといっていただろう。

三、新しい家族

(一) ライフスタイルの変化

国家が経済的に豊かになり、国民にまでそれが浸透し、生活のあらゆる側面が改善されると、社会にゆとりが生まれる。

国際化・情報化の進展は、学習量の増大をもたらすが、公民の通常の生活場面ではゆとり、余暇時間の増加のほうが大きい。

ゆとりは人の様々なあり方を認めることにつながり、価値観の多様化を生む。

ドイツのテンニスは人間が属する集団を結合の性質に着目し、共同社会的なゲマインシャフトという集団と、利益社会的なゲゼルシャフトという集団に分けた。

彼は、時代が進むにつれ、社会はゲゼルシャ

フト的になるとした（共同組合的なゲマインシャフト集団の出現にも触れている）。

しかし、ゲマインシャフトの中心をなす家族という血縁による基礎的集団は構成要員の立場の違い、つなりの強弱は変化しながらも、どの時代にも存在し、人類が知的でしかも心情をもつ動物として存在する限り消滅することはない。（アメリカのマードックは多数の未開社会に関するテータからの帰納的結論として夫婦とその子からなる家族的核が集団として普遍的存在であるとした。この説は基本的に否定されていない。）

一方、ゲゼルシャフトは目的を達すれば消滅する集団であるけれども、社会が豊かに複雑になりゆとりが生まれると、様々な価値観を具現するために増加する。

例えば一人の成人男性を考えると、江戸時代には血縁集団をのぞいて、彼が属する集団は、せいぜい村の一員、社の氏子、寺の壇家、等々あげられるに過ぎない。しかも生産と消費の

場が同一のため、家族集団と過ごす時間は圧倒的に多い。では、現在のサラリーマンはどうであらうか。会社・自治会・寺の壇家・ゴルフグループ・PTA会員・同窓会会員・組合メンバー・○○クラブ会員等々、限りがない。

家族以外の社会集団が飛躍的に増え、生産の場もそこに移ったために、人にとって自分の人生の中で家族以外の集団に属する時間が大幅に増加したことになる。

これは子どもにとっても同じ事で、学校教育の普及で家庭外の時間が極端に増えた。

つまり、人は子ども時代から、死ぬまで、家族以外との関わりが人生のメインになってきたのである。

つまり、ライフスタイルは家族から離れ、個人個人の生き方が問われる時代になったのである。

(二) 長寿社会

その中で、女性の社会進出と高齢化社会の到

来がおこった。

女性の社会進出は、高学歴化、晩婚化、少子化、子育ての外注化を生み、女性自身のライフスタイルの劇的な変化をもたらすとともに、その家族のライフスタイルの変化を促した。

しかし、それ以上に高齢化社会という現象は、われわれに生き方を問い直すきっかけとなった。

厚生省の人口問題研究所の日本の将来人口の一九九二年九月の推計によれば二〇一〇年頃に一億二千万人強となり、二十一世紀後半には、億人を割るとされている。この中で、高齢者人口は二十五パーセント以上に達するとされる。

オランダのパン・デ・カールが唱えた第二人口転換（合計特殊出生率が人口置き換え水準である約二・一を下回ることで、二・一ならば、静止人口となり人口は増えも減りもしない。）は、わが国では昭和四十九年から割り込んだままであり、ついに、一・五さへ切るに到った。つまり少子化の傾向はとどまるところを知らないか

のようなのである。

(三) セミ・ドライ家族

家族以外の集団との関わりが増え、女性の社会進出と長寿化がおこり、「人生の長い午後」といわれる定年退職後・子育て後の時間が急激に増大する。(長寿化の影に隠れているが、成人・結婚までの学校教育期間を中心とするモラトリアム時代も第二次大戦後急速に増加している。)

その中で、生涯学習がうたわれ、個々の新しいライフスタイルの構築が声高に叫ばれるようになった。

自立する女性に比べ、仕事一本で定年を迎えた男性は、在職中も「粗大ごみ」退職後は「濡れ落ち葉」「わしも族」などと呼ばれるようになる。

一方、家族集団は、生産・消費・育み・団らん・休息等の役割を失い、或いは外部に依存し、単なる消費の場になりつつある。

しかし、果たしてそれでよいのであろうか。確かに工業化社会にあって、生産の場としての家族を再生することは困難になった。けれどもホモ・サピエンスという人類にとって家族・家族の機能を放棄することは可能なのであろうか。

前述したようにマドックによれば、核家族は人類普遍の形態であると言う。

この核家族の機能を代替することが、ゲゼルシャフトの集団に可能であらうか。

もし、われわれが試験管ベビーを誕生後も育成できる組織・機械を作り得たとして、われわれはそれを望むであらうか。

スイスのアドルフ・ホルトマンによれば、人はその大脳の発達のために「生理的早産」であるという。本来進化の程度が高い動物は、少産で、雛巣性(生後すぐ自分の生命を自分で維持できる)をもっているが、人のみ体温さえ保てない状況で生まれ出る。

つまり、人は援助がなければ生存・成長出来

得ない生物なのである。

この意味では家族が必要だが、必ずしも家族でなくてもよい。人としての感情を備えたロボットのようなものでもかまわない。しかし、空想的産物はべつにして、母親や父親にかわる「信頼と愛情」を与えうる情感をもった組織や機械の出現は、まず、われわれの孫子の代になっても不可能だろう。

人は家族の中で、他の人に対する信頼感と社会性を獲得していくのである。そしてその基本は「愛情」である。

次に、親の立場から家族を考えてみよう。

われわれが生産行為によって子孫を残すのは、従来言われてきたように種の保存などのためではなく、自らの遺伝子を残したいという極めて利己的な行為とされる。これはリチャード・ドーキンスの説だが、実は個がどうしてできたかを追求したマーグリスの理論(共生システムが個体の基礎になっている)と併せて考えると、遺伝子(個)は自分の適応度を高めようと利己

的に振る舞うが、それでいて種全体がうまくいっているということになる。実はリチャード・ドーキンスも個は個以外の物のために生まれたという結論を得ている。

これは家族を考える上で極めて興味深い。

わが国では「家族あつての個人」という考えから、個々の自立が進み、ライフスタイルが多様化・長期化するなかで、「個人あつての家族」という考えに変わってきたが、実は共生システムが個人の生活の基礎になっているのである。

その共生システムとは必ずしも家族でなくてもいいのだろうか。

答えは前述した通りである。親対子という愛情を基本とした接触が人格の基礎を形成するのだから、個人が自分の子孫を残したいという本能を持つ限り、親子を軸とした家族は共生システムの基盤であることになる。

しかもその子孫は父母がなければ誕生し得ないとしたら、まさに核家族は人類普遍の基礎的
社会集団と位置付けられる。